2024 年度後期　大学入門ゼミフィールドワーク報告書

上ノ太子観光みかん園・住吉大社について

上の太子観光みかん園にて。撮影：2024 年 11 月 10 日。

阪南大学国際学部国際観光学科 渡辺ゼミ

はじめに：後期フィールドワークのテーマ決定まで

国際観光学科　SA　3 年　西脇俊太郎

後期の大学入門ゼミは 1 年生 5 人と SA（Student Assistant）の 3 年生 2 人と教員 1 人の 9 人でスタートしました。

後期の大学入門ゼミのフィールドワークには 3000 円で行ける範囲という外に特に制限はありません。フィールドワークの実施地を決めるために観光ガイドなどを見て、1 年生に行きたい場所を挙げてもらいました。秋の味覚からフルーツ狩りとなり、太子町でみかん狩りが出来ることがわかりました。

そこで、太子町を全体のテーマにすることにしました。みなで太子町周辺の観光地を調べて、自分のテーマを決めていきました。太子町には、みかん狩りのほかに、竹内街道、聖徳太子に関わるお寺があることもわかりました。私たちは太子町でみかん狩りをしたあとに、自転車で史跡をめぐるサイクリングをしようと計画しました。しかし、フィールドワーク実施時に予約していた自転車が返却されてないハプニング起きて、私たちは上の太子みかん農園を訪れただけで帰りました。

では、どうやってレポートを書けばよいのでしょうか。みなのスケジュールがあう日はもうありません。このため、ゼミの時間に近くに行こうとなりました。すると、住吉大社がいいのではないかと、1 年生が言いました。歴史もあるし、行事も多いし、調べることはたくさんありそうです。私たちは事前調査として、住吉大社のことが書かれた文献を読んで住吉大社の歴史や建築様式などを調べました。また、前期のレポートではテーマがかぶってしまうことがあったので、後期では事前にレポートのテーマを決めてからフィールドワーク行きました。住吉大社の調査は 12 月 4 日の 3 限の入門ゼミの時間に実施しました。住吉大社のフィールドワークはつつがなく進行しました。

この 1 年間の大学入門ゼミを通して、1 年生も大学の雰囲気に慣れてくれたようです。残りの 3 年間の大学生活が楽しく、実りのあるものになればいいと私は思います。

みかん狩りで学んだこと－上の太子観光みかん園を訪れて－

国際観光学科　1 年　橋爪幹太

後期のフィールドワークでは、「秋らしいことをしたい」ということになり、みかん狩りをすることになりました。本レポートでは、2024 年 11 月 10 日（日）にフィールドワークで訪れた「上ノ太子観光みかん園」について書いていきます。

予定では、近鉄南大阪線上ノ太子駅から自転車をレンタルして、上ノ太子観光みかん園までいく予定でした。しかし、前日に別の観光客が借りた自転車がまだ人数分返却されておらず、急遽上ノ太子観光みかん園まで送迎用のマイクロバスで行くことになりました。自転車に乗れなかったことは残念でしたが、坂道がきつく、マイクロバスでも良かったと思いました。

上ノ太子観光みかん園に着いてからも、入口からみかん狩りをする場所まで急な坂道を 20 分ほど歩きました。さらに上のほうには遊具が置いてあり、子供たちが遊ぶスペースもありました。みかん狩りの場所に到着後、すぐにみかん狩りをしました。たくさんみかんを取れましたが、甘めのみかんは少なく、すっぱめのみかんが多かったです。

みかん狩りや BBQ を楽しんだ後に、上ノ太子観光みかん園の職員の方にお話を聞くことができました。上ノ太子観光みかん園自体は昭和 40 年に完成し、毎年 10 月から 11 月にみかん狩りを開放しています。みかん園は頂上だけでも 1 万㎡で、2 万 1 千坪の大きさがあります。上ノ太子観光みかん農園は年間 3 万人から 3.5 万人の観光客が訪れ、平日には幼稚園～高校生までが遠足で訪れています。みかん農園で取れたみかんは基本出荷しませんが、竹内街道の道の駅には出荷をしています。上ノ太子みかん農園にはみかん狩りのほかにも BBQ 施設や軽食が取れる場所もあります。そこの厨房で働いている女性は上ノ太子観光みかん園で働いている職員の方の奥さんです。なぜみかん農園を全員で協力して運営しているのかというと、個人でみかんを作っても多くの収穫をすることができないからです。みんなで協力し、みかん農園を運営することによって、年間約 3 万人の観光客がみかん狩りをすることができる施設へ成長しました。上ノ太子観光みかん農園にはみかん狩りのほかにもぶどう狩りもおこなっています。ぶどう狩りを運営しているメンバーはみかん狩りの運営をおこなっているメンバーと同じ人たちが運営しているそうです。

今回のフィールドワークで、よかったことが 2 つあります。一つ目は、みかん狩りの魅力について学べたことです。実際に体験してみて、自分でみかんを狩れることもよかったし、景色もよかったです。天気もよかったので頂上からは、大阪市内、二上山から金剛山まで見ることができました。当日たくさんの観光客が来ていた理由がよくわかりました。二つ目はみかん狩りの経営方法についても学ぶことができたことです。みんなでばらばらで経営するよりも、みんなで一緒に経営することによって、規模も拡大し、お客さんもたくさん来てくれるという経営のやり方に関心を持ちました。

写真１　上の太子観光みかん園

写真２　みかん狩りをして、バーベキューも楽しみました。

住吉大社の本殿を訪れて

国際観光学科３年　SA　大場諒也

大学入門ゼミ後期のフィールドワークでは、大阪市住吉区にある住吉大社に訪れました。祀られている神様、行事、太鼓橋など、住吉大社について各自調べました。私は、住吉大社の本殿の建築様式について調査し、他の神社の本殿と何が違うのかを調べていきました。

はじめに、神社の本殿には、大きく分けてある神社の系列のみで使われた特殊な形式と、系列によらず広く使われた一般的な形式の２つがあります。特殊な形式の代表である伊勢神宮の神明造と出雲大社の大社造については、『古事記』や『日本書紀』に記録があり、その歴史は古いです。２つの神社の形式は対照的で、地方神の象徴で天皇神に国譲りを行ったという神を祀る大社造（たいしゃづくり）は、正方形平面の中心に岩根御柱（いわねのみはしら）と呼ばれる太い柱が立つ高大な建物であるのに対して、天皇家の祖先神を祀る神明造（しんめいづくり）は、長方形平面の両側面に棟を支える棟持柱（むなもちばしら）が独立して立ち、全体に白木（しらき）を使った直線構成の端正なものになっています。特殊な形式としては、他に宇佐八幡宮（うさはちまんぐう）の八幡造（はちまんづくり）などがあります。次に一般的な形式では、最も広く使われた流造（ながれづくり）と次に数の多い春日造（かすがづくり）があります。この２形式の共通性は小規模であることと建物が井桁型の土台の上に建つことにあります(1)。この２つの形式のうち、住吉大社の本殿は特殊な形式に分類されています。

住吉大社の本殿の作りは住吉造といい、神社建築史上最古の様式の１つです。屋根はヒノキの皮を敷き重ねて屋根をふいた桧皮葺（ひわだぶき)で、妻入（つまいり）の切妻造（きりつまづくり）の特徴をもつ直線的な建築です。室内は外陣(げじん)と内陣(ないじん)の二間に分かれ、内陣は一段高く造られています。外観の柱は丹塗(にぬり)、壁は胡粉塗(ごふんぬり)といってカキなどの貝殻を磨り潰した塗料で彩色されています(2)。そして、住吉大社には本殿が４棟あり、その全てが国宝に指定されています。住吉大神と神功皇后（じんぐうこうごう）を祀る四本宮は、第一・第二・第三本宮が縦直列、第三・第四本宮が横並列という独特の配列になっています(3)。かつては住吉大社の４つの本殿は 20 年ごとに解体・再建されていました。しかし、16 世紀の内乱でこの習慣は中断し、19 世紀初頭には完全に放棄されました。現在の本殿は 1810 年に建てられたものです(4)。

実際に住吉大社へ訪れて本殿を見た時、調べていた時とはまた違う面白さがありました。特に面白いと感じたのは、外観が本殿１つ１つ違っていたということです。第三・四本宮の外観は私が見た感想ではほとんど同じ形でしたが、第二本宮は正方形のように均等な形に見え、第一本宮は他の本宮より大きく、存在感がありました。このように、住吉大社の本殿は見るだけでも楽しみがある素晴らしいものだと私は思いました。

本殿の屋根を見た時、すぐに桧皮葺を用いた切妻造なのだと分かりました。そのぐらい屋根の作りが特徴的で、特に桧皮葺は自分が想像していた厚さより厚かったので、とても印象に残りました。

写真１　第一本宮

写真２　第二本宮

写真３　第三本宮と第四本宮

写真４　本宮の屋根

いずれも撮影：大場諒也

フィールドワークと通して、自分の周りにはまだまだ知らないことがたくさんあることを再認識できました。今回、住吉大社に行きましたが、住吉大社のことは知っていても、その作りや歴史のことは知らなかったので、勉強にもなりました。自分の周りの他の神社などにはどんな知らないことがあるのかと思うようになりました。

【注】

(1)松崎照明 2023『図解はじめての日本建築』丸善出版, 36 ページ。

(2)住吉大社公式ホームページ「住吉大社建築様式」
https://www.sumiyoshitaisha.net/about/architect.html（参照日：2024 年 12 月 12 日）

(3)住吉大社公式ホームページ「住吉大社の本殿」
https://www.sumiyoshitaisha.net/kankou_jp/（参照日：2024 年 12 月 12 日）
(4)国土交通省「住吉造」https://www.mlit.go.jp/tagengo-db/common/001558350.pdf
（参照日：2024 年 12 月 12 日）

【参考文献】

・松崎照明 2023『図解はじめての日本建築』丸善出版
・住吉大社公式ホームページ「住吉大社建築様式」
https://www.sumiyoshitaisha.net/about/architect.html（参照日：2024 年 12 月 12 日）
・住吉大社公式ホームページ「住吉大社の本殿」
https://www.sumiyoshitaisha.net/kankou_jp/（参照日：2024 年 12 月 12 日）
・国土交通省「住吉造」https://www.mlit.go.jp/tagengo-db/common/001558350.pdf
（参照日：2024 年 12 月 12 日）

住吉大社の神様

国際観光学部１年　安藤栞

日本最古の神社の一つである住吉大社にフィールドワークに行き、住吉大社の主祭神について調査しました。住吉大社は、全国に 2300 社ある住吉神社の総本社で、摂津国一之宮として崇敬をあつめ、年のはじめには 200 万人以上の参詣者が訪れます[(1)]。

住吉大社には四主祭神がおり、表筒男神（うつつのおのみこと）、中筒男神（なかつつのおのみこと）、底筒男神（そこつつのおのみこと）の三神と、息長帯比売神（おきながたらしひめのみこと）=神功皇后(じんごうこうごう)の四神です。この神々は平安時代中期以降には和歌の神様として重んじられるようになり、他にも航路守護と軍事の神としても民からの信仰を集めていました[(2)]。

現在でも、住吉大社は多くの人たちに親しまれ、初詣や厄除けなど、様々な願いを込めて参拝する人が大勢います。また、毎年夏に行われる住吉祭では、大阪を代表する祭りと知られており、多くの人々が訪れます。

住吉大社の住吉大社御由緒について実際に足を運んで調査してきました。

まず、御祭神は第一本宮に底筒男命、第二本宮に中筒男命、第三本宮に表筒男命、第四本宮に息長足姫命の４人の神様が存在するとわかりました。

御由緒について。看板によると、底筒男命・中筒男命・表筒男命の三神を総称して住吉大神という。住吉大神の「吾（あ）が和魂（にぎみたま）をば宜（よろ）しく大津（おおつの）渟中倉（ぬなくらの）長峡（ながを）に居くべし。便（すなわ）ち因（よ）りて往来（ゆきか）ふ船を看（み）む（現代語訳：私たちの和魂を大津の渟中倉の長峡（現在の大阪市住吉区）に鎮座させよ。そうすれば往来する船を見守ろう）」との御神託(ごしんたく)により、神功皇后がこの地に御鎮祭になりましたのが、皇后の摂政十一年辛卯の歳と伝えられているとされています。

御神徳について、住吉大神は伊弉諾尊(いざなぎのみこと)の禊祓(みそぎはらえ)に際して海の中でお生まれになった神様でありますから、禊祓・海上守護の御神徳を中心とし、古来産業・文化・外交・貿易の祖神と仰がれ　常に諸願成就の名社として広く普く崇敬されていました。

御社殿について、第一本宮より第三本宮までは縦に、第四本宮は第三本宮の配列に奉祀されています。各本宮ともに本殿は住吉造(すみよしづくり)として、神社建築史上最も古い様式の一つで、妻入式（つまいりしき）切妻造(きりつまづくり)の力強い直線をなし、四本殿とも国宝に指定されています。

住吉大社には他にも御所午前参り「五大力」(ごだいりき)といった住吉さんのパワーストーンに関する信仰もあります。五所御前(ごしょごぜん)の垣内(かきつ)の玉砂利(たまじゃり)から自分で五大力を探し出し、お守りにすることができる場所がありました。ここで

書かれている「五大力」とは、体力・智力・財力・福力・寿力などさまざまな心願成就のお守りにする信仰しています[3]。

地元の人によると、五大力守を自ら作り、その時願った願い事が叶うと、「感謝の小石」3個に自分で五・大・力と書き、最初に授かった小石3個と合わせて、計6個の小石を元の場所に「倍返し」をする仕組みであることを知りました。

実際、自分たちで五大力を探してみたのですが、なかなか見つかりません。目を凝らしてみないと文字が書いているのかどうかも分からないほどでした。御所御前の前で五大力を探していると、地元の方が五大力について詳しく教えてくださり、さらに理解を深めることができました。

五大力にはそれぞれの力に特徴があり、人間の生活と密接に関わっていると感じました。例えば、恵比寿神(えびすしん)は漁業の神様としてだけでなく、商売繁盛の神様としても信仰されています。多様な側面を持つ神様であることに興味を持ちました。

住吉大社には、第一、第二、第三本宮が縦に直列していて、第三、第四本宮が横に並列していて、独特な配列だなと感じました。出会った地元の人がいうには、大海原行く船団のように四本宮が並んでいるとおっしゃっていました。それを聞いて、なるほど、住吉大社はたしかに海と関係しているところなのだと思いました。

フィールドワークで初めて住吉大社を訪れました。緑豊かな木々や池が美しく、心が安らぐ空間でした。神聖な空気に包まれ、自然と一体になったような感覚を味わえました。また訪れたいと思う場所です。

参考文献

(1)「一宮を訪ねる旅」製作委員会 2024 年『シリーズ旅する日本百選④一宮を訪ねる旅西日本編』東京ニュース通信社

(2)住吉大社公式ホームページ https://www.sumiyoshitaisha.net/ (採録日:2024 年 12 月 10 日)

(3)住吉大社五大力(住吉大社パンフレット)

写真 1「反橋と紅葉」撮影者:安藤栞

写真 2　地元の方に五大力の話を教えてもらうゼミ生

住吉大社の行事

国際観光学科１年　山田伊吹

大学入門ゼミでは、後期のフィールドワークを行った住吉大社の行事のことについて書いていきます。住吉大社は大阪にある古い神社であり、多くの年中行事が行われています。

その行事は地域の文化や伝統を反映し、人々に様々な体験を提供しています。 住吉大社の年中行事は主に、初詣や節分祭、住吉祭などの多くの行事があります。その中で私が気になったのは、御田植神事（おたうえしんじ）です。日程は、6 月中旬ほどからで場所は第一本宮から御田（おんだ）の間で行います。この行事は都会の真ん中で田植えをするという、非日常なところを住吉大社では目にすることができるので、私はとても魅力的に感じました。由来としては、穀物の豊かな実りを祈願するところから始まり、鎌倉時代には猿楽・田楽などの数々の芸能が見えており、規模がとても大きくなっているみたいです。明治維新の際に神事廃絶の危機もあったようですが、この伝統は末永く受け継がれ、昭和 54 年 2 月 24 日に国の重要無形民俗文化財に指定されました(1)。

この行事の様子は植女（うえめ）や稚児（ちご）などの行事にかかわる人がお祓いを受け、第一本宮で神事の秦告祭を行います。そして行列になって御田に向かい、御神水を御田の四方に注ぎ、早苗の教授が行われます。その様子は賑やかで、とても楽しい気分になれるそうです(2)。

もう一つ興味深い行事に住吉大社の目玉の住吉祭があります。この行事は様々な神事を連続ですることで完成されており、日程は海の日と 7 月 30 日～8 月 1 日の間に行います。この際は古くから大阪中をお祓いする「お清め」の意義があり、古くから「おはらい」とよばれていました。海の日に「神輿洗神事（みこしあらいしんじ）」、7 月 30 日に「宵宮祭」、翌日 7 月 31 日に「夏越祓神事（なごしのはらえしんじ）・例大祭（れいたいさい）」、そして 8 月 1 日に「神輿渡御（みこしとぎょ）」が行われています。まず、神輿洗神事とは 8 月 1 日に行う神輿渡御に先だってその神輿を清める神事です。神輿を住吉大社から、住吉公園まで巡行し、海水によって清められます(3)。

7 月 30 日の宵宮祭とは前日に行われる祭典で、宵宮（よいみや）または夜宮（よみや）とも呼ばれています。そして、大阪府指定民俗文化財である夏越祓神事・例大祭は五月殿で大祓式が行われてから、参拝者も行列に参加して本宮に参進します(4)。

8 月 1 日には大阪一の神輿渡御が行われます。住吉大社の神霊を神輿にお遷（うつ）しし、御旅所である堺の宿院頓宮（しゅくいんとんぐう）まで行列を仕立てて巡行します(5)。その迫力はとてつもなく圧巻されると思います。最後に、住吉大社の行事はとても魅力的で、人生に一度は見たいと思いました。

注

(1) 高橋秀雄・森成元 1993『祭礼行事・大阪府』桜楓社, pp.41-42.
(2) 同書, pp.42-43.
(3) 同書, pp.46-47.
(4) 同書, pp.48-49.
(5) 同書, pp.49-50.

参考文献

高橋秀雄・森成元 1993『祭礼行事・大阪府』桜楓社

写真 1　住吉大社の御田（おんだ）

住吉大社の神獣・狛犬

国際観光学科１年　古石まりあ

後期のフィールドワーク先が住吉大社に決まり、何について調べるかを決めるために図書館に行きました。そこで『神使像図鑑：神使になった動物たち』という本を読みました。この本には、神社の境内にある狛犬（こまいぬ）以外の動物像が載っていたり、その動物がなぜ神使（しんし）になったのかが書かれていました[1]。住吉大社の兎（うさぎ）という所に「神功皇后」（じんぐうこうごう）が住吉の地に住吉大神を祀ったのが辛卯の年（211）卯月の上の卯日だとされることから、住吉神社ではウサギが神使とされていることを知りました。この本を通して様々な神社に神使としてたくさんの動物たちが祀られているのに、なぜ鳥居の両サイドに狛犬が祀られているのか、狛犬の意味について気になりました。

そこでもう一度図書館に行き『日本人として知っておきたい神道と神社の秘密』という本を読みました。一般に狛犬は神社にとって魔除けの犬などと思われていることが多いです。しかし、著者の山田有司氏によると、大きな目や派手な巻き髪などから狛犬のモデルは犬ではなく、「獅子」（ライオン）なのだそうです。紀元前 3000 年ごろに成立したエジプトの王家などでは、百獣の王と称されるライオンこそが王家の守護に相応しいと考えられていたことからライオンが神獣として認識され、日本にも伝わってきたといわれています[2]。

狛犬が日本に伝わってから、日本独自のスタイルを確立することとなりました。それが現在でもよく見かける口の形の異なる「阿吽型」（あうんがた）です。口が開いてるほうが「阿形」（あぎょう）、閉じているほうが「吽型」（うんぎょう）です。「阿」（あ）は宇宙の始まり、「吽」（うん）は宇宙の終わりを意味することから、狛犬の表情は神聖な場所を護衛するに相応しい神獣であるとされています[3]。この本を読み、神使と狛犬の違いを知ることができました。

そして私は実際に住吉大社に訪れました。赤い太鼓橋が見え、テンションが上っていると、正面に鳥居がありました。さっそく一つ目の狛犬を見つけました。写真を撮ろうと近づくと、あまりに大きくてびっくりしました（写真１）。太鼓橋に向かって歩いていくと、また太鼓橋の両サイドに狛犬を見つけました。この狛犬は正面鳥居の狛犬より小さく感じました（写真２）。

太鼓橋を渡り、第一本宮から第四本宮をみて回りました。そのあとはいろいろなところを歩いて回り、狛犬を探しました。訪れた時間が少し遅かったため、入れないところが多かったのですが、何度か住吉大社に訪れた中で、入ったことのない良縁の神様が祀られている侍者社（おもとしゃ）に行ってみました。他の神様が祀られているところとは少し雰囲気が違うようにも感じました。靴を脱いで入ると、下は畳で、まわりの棚には大量の土人形などの小さな人形が並べられていました。そこには二種類、四体の狛犬がいました。サイズも小さく、あまり見ない顔をしていました（写真３）。

写真１　鳥居前の狛犬、撮影：古石まりあ

写真３　侍者社内の狛犬　撮影：古石まりあ

写真２　太鼓橋前の狛犬、撮影：古石まりあ

写真４　住吉公園の狛犬、撮影：古石まりあ

住吉大社の境内を見終わった後、住吉公園に向かいました。公園の入り口で手元にボールのようなものを持っている狛犬を見つけました。日が暮れていたのか、まわりも暗く、ほかの狛犬に比べて険しく、強そうで、少し怖い表情に見えました。私が撮影した狛犬の写真の中で一番のお気に入りです（写真４）。

私は今回八対、十六体の狛犬を見ることができました。狛犬を探しながら神社の中を歩く

のは初めてで、新鮮で楽しかったです。狛犬の顔の違いや体のつくり、何か持っている狛犬など、また気になることが出てきました。今回、住吉大社で見れなかった場所にも訪れて、狛犬をみたいと思いました。

注

(1)福田博通 2012『神使像図鑑：神使になった動物たち』新協出版社, p.1.

(2)山田有司 2022『日本人として知っておきたい神道と神社の秘密』彩図社, p.116.

(3)山田有司 2022『日本人として知っておきたい神道と神社の秘密』彩図社, p.118.

参考文献

福田博通 2012『神使像図鑑：神使になった動物たち』新協出版社。

山田有司 2022『日本人として知っておきたい神道と神社の秘密』彩図社。

住吉大社のうさぎと安産祈願

国際観光学科１年　川村あん乃

はじめに、私は住吉大社のうさぎについて興味をもちました。調べていくうちに、住吉大社は安産祈願にも関わっていることがわかりました。なぜうさぎが安産に関わるのか疑問に思い、住吉大社の神様はどんな神様なのかを調べることにしました。

事前学習でわかったこと

大阪で初詣といえば住吉大社です。全国の住吉神社約 2300 社余の総本社であり、日本を代表する神社の一つであります。

住吉大社は、卯（うさぎ）に縁のある神社としても知られています。この地に住吉大社を祀った日が 211 年・辛卯（かのとう）年の卯月卯日である縁から「うさぎ」が神使（しんし）とされ、境内には「卯の日」の名が残る参道もあるといいます。正面参道の「反橋」を渡った左手にある「手水舎」には、うさぎの手水口があります。さらに、「第四本宮」前には翡翠（ひすい）の「住吉神兎（すみよしうさぎ）」があります。卯年の 2011 年に奉納された。住吉神兎は「なでうさぎ」とも呼ばれ、兎の体を撫でて無病息災を祈願します(1)。

安産の信仰も集めている住吉大社には、たくさんの人が安産祈願に訪れています。住吉大社では、第四本宮の祭神「神功皇后（じんぐうこうごう）」は、身籠ったまま出陣され、住吉大神の神徳により無事帰還し、御子の応神天皇（八幡神）をお生みになりました。従って、住吉大社には安産のご利益があるといわれています。そんな住吉大社では戌（いぬ）の日に限らず、毎日、安産祈願のご祈祷を受け付けています。神職によるお祓いと祝詞奏上（のりとそうじょう）をして頂いたあと、おさがりとして、「腹帯」「子まもり」「誕生石の御守」が授与されます(2)。

実際に行ってみて感じたこと

現地を訪れて、一寸法師発祥の地が住吉大社ということを初めて知りました。住吉大社の看板によると、昔話で有名な一寸法師は室町時代から江戸時代にかけて作られた『御伽草子』に出てきます。この物語の冒頭は、住吉大社の神様のおかげで子供を授かったところからはじまるのだそうです。

その背景には、住吉大社のご加護を得て神功皇后が応神天皇をご出産したり、鹿児島の島津忠久公が生まれるなど、住吉大社の種貸社は、子宝を授ける神様とされてきました。また、これが転じて、農業の種を授ける神社、商売の手元となる資本金を貸したり、良い知恵を授ける神様して信仰されてきました。「子宝、資本、元種の神、住吉種貸社、知恵、住吉の御書に、未茶昌に栄え給ふ、世のめでたきためし、これに過ぎたることはよもあらじとぞ申し

侍りける」というパネルがありました。あの有名な昔話、一寸法師が住吉大社発祥だとはびっくりしました。

そして、事前に調べていた住吉大社のうさぎもおりました。手水舎の所だったり、翡翠（ひすい）だったり、うさぎが至る所にいました。私も住吉大社の神使、翡翠の撫（な）でうさぎの五体を撫でて、無病息災を祈念しました。人生で初めて行った住吉大社はすごく面白かったです。

事前に調べていたうさぎのことだけでなく、住吉大社の五大力というものがありました。鳥居をくぐり反橋（そりばし）を抜けた後、「第三本宮」「第四本宮」の間をまっすぐ進み、「第二本宮」右側をなおまっすぐ進み、赤い鳥居を進むと、石玉垣（いしたまがき）があります。そこが五所御前（ごしょごぜん）です。五所御前は、 神功皇后が住吉大神をお祀りするための場所を探しているとき、３羽の白サギが飛んできてこの杉の木にとまったので、ここへお祀りしたと伝わる、住吉大社の中でも特別な聖地とされています。この玉垣の中に小さな石がたくさん敷き詰められているのですが、その石の中に「五・大・力」が書かれているものがあり、それを 3 つ集めお守りにすると心願成就のご利益があるといわれています。わたしも、住吉大社にいた地元の方にその話をきき、お守りの石を探す事にしました。10 分程探すと「五・大・力」と書いた石を見つけることが出来ました。

住吉大社のことを学んでみて、はじめはウサギを見てくればいいのかなと思っておりました。しかし、実際に行ってみると、ウサギは安産の神様の使いで、安産は神功皇后の故事に因んでいることがわかりました。安産の神様だから子宝を授けてくれるのですが、その他にも、一寸法師発祥の地だったり、その神社で畑にまく種を貸してくれたり、商売の元手を貸してくれたりと、いろんなことが安産と繋がっていました。多方面なお願いごとを聞いて下さる多才な神様だと思いました。はじめての知ること、はじめての経験ばかりで、楽しかったです。

注

(1)住吉大社ホームページ https://www.sumiyoshitaisha.net/（閲覧日：2025 年 1 月 22 日）。

(2)同上。

写真１　住吉大社の撫でうさぎ

写真２　種貸社の前にあった一寸法師のお椀

住吉の高灯籠：失われた海を求めて

国際観光学科教員　渡辺和之

住吉の高灯籠（たかとうろう）は住吉大社の大鳥居から西、南海電車の住吉大社駅を通り過ぎ、住吉公園を横切った所にあります。住吉大社は、古くから海の守り神として知られてきました。「明石海峡を航行する船が住吉の高灯籠を見つけたらその方向が真東だ」と、以前、生き物文化誌学会で住吉大社にお邪魔した時、宮司さんから教わりました。しかし、現在の高灯籠の周りにはビルや家が建ち並び、近くに海は見えません。

源氏物語で住吉の浦と言われた海はどこへいってしまったのでしょうか。そんな疑問を私はかねてから抱いていました。調べてみた所、水内俊雄・小出英詞（編著）2023『住吉公園と住吉さん』東方出版という本を見つけました。そこで、このレポートでは、この本にある資料（古い地図）を頼りに、高灯籠を失われた海の道しるべ（澪標）として、（身を尽くして）歩いたことを紹介します。

日下雅義氏によると、古代の住吉大社の前までは住吉津（すみよしのつ）と呼ばれる入江が広がっていました[1]。住吉大社は、天王寺や帝塚山同様、上町台地の西端に位置します。その西側には、天満砂洲と呼ばれる砂浜が広がっていました。現在の地名を見ても、南海電車を境に、西側には粉浜、住の江、御崎など、海岸線を示す地名が残っています。高灯籠ももともとは上町台地と砂洲の間に広がる海岸線に位置していたのです。それが、砂洲や入江が埋め立てられてゆく過程で、陸地に取り残されてしまったのでしょう。

『住吉公園と住吉さん』によると、江戸時代後期の『摂津名所図会大成』には、以下のような記載があります。

【原文】

高灯籠、出見の浜（いでみのはま）にあり、夜ばしりの船の極（めあて）とす。闇夜に方角（ほうがく）を失ふとき、住吉大神を祈れば、此灯籠の灯（あかり）ことに煌煌（こうこう）と光鮮（ひかりあざやか）なりとぞ。

【現代語訳】

出見の浜（住吉浜の別称）で月明かりのない夜間に方角がわからない時、住吉大神に祈れば、この灯りがより一層光り輝いていたという[2]。

絵図として住吉の高灯籠の初見は、江戸時代中期の明和 11（1771）年の『住吉社細見絵図』です。文政 5（1828)年の『住吉往来』には、「すみよしの浜、常夜灯の高楼（たかどの)」とあります[3]。また、江戸時代末期の天保 5（1834)年の『大湊一覧』には高灯籠のすぐ近くに海岸線があったことが描かれています[4]。この海は江戸時代のはじめに長峡浦（ながおのうら）と呼ばれていたが、やがて新田開発によってだんだんと埋め立てがすすんだそうです。明治 36（1903）年の『住吉神社及公園之真景』を見ると、高灯籠と長峡浦の間には十三間堀川（じゅうさんげんぼりがわ）が流れており、そこに長峡橋がかかっていました[5]。大正

末期の『大阪市大地圖』(1925 年) では、さらに埋め立てがすすみ、「長峡濱 (ながおはま)」と呼ばれるようになります[6]。

高灯籠は昭和 25(1950)年の台風で大破し、昭和 29(1954)年に解体されました。その後、阪神高速の工事に伴い、昭和 47 (1972) 年には残っていた基礎の石積も解体撤去しました。その後、地元の要望で、昭和 49(1974)年に住吉公園西側部分に鉄筋コンクリート造で復元されました[7]。つまり、もともとあった高灯籠は現在の位置よりもさらに西の阪神高速 15 号線のあたりにあったのです。

現在の地図を見ると、十三間堀川も長峡橋もありません。十三間堀川は、阪神高速工事の際に埋め立てられたのでしょう。また、長峡浦と呼ばれた入江は住吉川となり、両岸が埋め立て地となりました[8]。

現在の高灯籠は、南海の住吉大社駅から西に行き、ちょうど住吉公園を出た所の交差点の北西側に建っています（写真１）。ここから西へかつての塩掛道（しおかけみち）をしばらく歩くと、阪神高速道路に出ます。このあたりに以前の高灯籠は建っていたのでしょう。ということは、この交差点に十三間堀川が流れていて、長峡橋があったことになります。道は交差点からさらに西へ向かっています。でも、ここから海は見えません（写真２）。ところが、交差点を左折し、100m 程南へ歩くと、南から流れてくる川に出ました。これがかつての十三間堀川です。川はここで西に 90 度向きを変え、住吉川となって海へ向かっています（写真３）。川の北側には遊歩道がありました。住吉川を渡る橋には亀の甲橋とあります。つまり、この住吉川こそが縮小された江戸時代の長峡浦であり、平安時代の住吉の浦であり、古代の住吉の津なのです。

われわれはここで満足して帰りました。だが、あとで地図を見ると、住吉川のまわりには水に関わる施設が多いことに気がつきました。住之江公園には、大きな池があります。住之江競艇場は埋め立て地の上にあります。また、西へ行くと、貯木池と呼ばれる材木の貯蔵施設が多くあります[9]。これらの施設はみな昔海だった地形を生かし、水辺の空間となっているのです。住吉の高灯籠は身を尽くし、海の行方を照らし出すかな。

注

(1)水内俊雄・小出英詞編著 2023『住吉公園と住吉さん』東方出版, pp.168-169.
(2)同書, p.80.
(3)同書, p.80.
(4)同書, p.87.
(5)同書, p.84.
(6)同書, p.88.
(7)同書, p.82.
(8)昭文社 2016「都市地図大阪市」昭文社
(9)同地図

参考文献

水内俊雄・小出英詞(編著)2023『住吉公園と住吉さん』東方出版
昭文社 2016「都市地図大阪市」昭文社

写真１　住吉の高灯籠

写真２　かつて高灯籠のあった阪神高速下から西を望む

写真３　亀の甲橋からの住吉川

あとがき

今年は総合型選抜で入学した1年生のAOクラスを1年間担当しました。石川県から来た男子学生もすっかり大学に馴染んだようで、毎週欠かさずにゼミにも出席しています。12月には同級生とアパートで鍋をしたようで、大学以外でもみななかよくやっているようです。こうやってみんなと仲良くたわいもないことを喋っているのが楽しいと言っていました。「地方から来た学生を吸い上げてしまって、大阪は罪な街だ」と私が言うと、同級生の女子学生いわく「あの子はしょっちゅう実家へ帰っているから大丈夫！」とのことでした。4年間、阪南大学でしっかり学び、卒業後は石川県の復興のために尽力して欲しいと思いました（渡辺和之）。

写真　おもかる石を持ち上げるSAの学生。1年間お疲れ様でした。

＋＋

渡辺和之（編）『2024度後期大学入門ゼミフィールドワーク報告書』阪南大学国際学部国際観光学科渡辺研究室　2025年1月31日発行
〒580-8502 大阪府松原市天美東5-4-33 阪南大学渡辺和之研究室

電話：072-332-1224（内線：8326）メール：watanabe@hannan-u.ac.jp

URL　https://www.hannan-u.ac.jp/
Kazuyuki Watanabe (ed.) 2025 Kamino Taishi Tourist Mikan Park and Sumiyoshi Taisya Shrine: Students' Fieldwork Reports 2024 (part 2). Osaka: Department of International Tourism, Hannan University.
Address: 5-4-33, Amami-Higashi, Matsubara, Osaka, 580-8502, Japan.

E-mail: watanabe@hannan-u.ac.jp
本レポートの写真は一部を除き、すべて渡辺が撮影しました。

＋＋